

涸れた谷に鹿が水を求めるように
神よ、わたしの魂はあなたを求める。
神に、命の神に、わたしの魂は渴く。
いつ御前に出て
顔の御顔を仰ぐことができるのか。
昼も夜も、わたしの糧は涙ばかり。
人は絶え間なく言う。
「お前の神はどこにいる」と。

（詩 42 篇 2～4 節）

1. この詩の背景

この詩人はエルサレムから遠く離れた場所にいます。7 節に「ヨルダンの地から、ヘルモンとミザルの山から」とありますので、イスラエルの北方、辺境と言ってよい場所です。この詩は「コラの子の詩」（1 節）とありますが、コラは、祭司の家系の一派でしたが、当時、なんらかの派閥争いによって神殿をおわれ、この北の地に流れてきたようです。そこで詩人は「渴き」を覚えているのです。それは魂の渴きです。

2. 黙想（1）

唐の詩人李白に「静夜思」という作品（五言絶句）があります。その最後の二連が「頭（コウベ）ヲ拳ゲテ山月ヲ望ミ 頭（コウベ）ヲ低レテ故郷ヲ思フ」です。やはり異郷にあって詩人は故郷に思いを飛ばしています。井伏鱒二はこれを「ノキバノ月ヲミルニツケ ザイショノコトガ気ニカカル」と訳しました。「ザイショ」は「在所」であり、「故郷」ですが、旧約の詩人にとってそれは生ける神との交わりをもつことの許された神殿でした。いや、この場合、神殿から物理的に遠くに置かれているがゆえに、場所ではなく、生ける神ご自身を慕って、涸れた川床に水を求める鹿のように鳴いているのです。呻いていると言ってよい。いまコロナウィルス感染対策下において皆が移動の自由等、何らかのかたちで制限しなければならない状況です。わたしたちの経験を、詩 42 篇の詩人にふれさせることを通して、嘆きの言葉と神への信頼を学びたく思います。わたしたちも生ける神を慕い求め、共に礼拝できる日を待ち望みたいと思います。わたしの好きなアウグスティヌスの祈りも、この詩人の思いに近いですね。

「神よ、あなたは、わたしをあなたご自身に向けてお造りになりました。ゆえにわたしはあなたのうちに憩うことなしには安らぎを得ません」

「祈りのある生活」から「祈りに生かされる生活」へのよい時として用いられますように。